

平成 30 年度江別市大学連携調査研究事業補助金採択事業  
江別市における子どもの貧困対策に関する実践的調査第 2 報  
～江別市版子どもの貧困対策ハンドブックの作成～

報告書

2019 年 4 月 13 日  
報告者：飯田 昭人  
北翔大学教育文化学部心理カウンセリング学科准教授・臨床心理士



### 1. 本報告書の位置づけ

本報告書は、平成 30 年度江別市大学連携調査研究事業補助金採択事業の「江別市における子どもの貧困対策に関する実践的調査第 2 報～江別市版子どもの貧困対策ハンドブックの作成～」である。

副題の「江別市版子どもの貧困対策ハンドブックの作成」については、この報告書とは別に作成しているので、本報告書は、ハンドブック作成に至る経緯について報告する。



### 2. 平成 29 年度江別市における子どもの貧困対策に関する実践的調査研究のダイジェスト知見およびそこから浮かび上がる課題

平成 29 年度は、江別市大学連携事業「江別市における子どもの貧困対策に関する実践的調査研究」と題し、市内の小学校全 18 校、中学校全 8 校（私立中を除く）、保育施設（保育園、幼稚園、認定こども園、小規模保育施設、事業所内保育施設、家庭的保育施設）27 施設の合計 53 施設を対象にアンケート調査を依頼した。そのうち、小学校 15 校 283 件（72.0%）、中学校 8 校 188 件（82.8%）、保育施設 18 施設 213 件（56.8%）、合計 41 施設 684 件（68.7%）から回答を得た結果を分析した知見を以下に示す。

保育施設、小学校、中学校で働く保育士や教職員等に対して次の 2 点を調査した。

1 点目は、「子どもの貧困状況の捉え方」「子どもの貧困状況において併せて見られる現象」「貧困状況にある子どもの困難についての捉え方」の 3 点について、因子分析を用いて検討・考察した。

2 点目は、貧困家庭への支援においての必要性の回答が、「強く感じている」「やや感じている」と回答した対象者を「必要群」、「まったく感じていない」「あまり感じていない」と回答した対象者を「不要群」とし、「子どもの貧困状況の捉え方」「子どもの貧困状況において併せて見られる現象」「貧困状況にある子どもの困難についての捉え方」の各項目の平均値に差があるかどうかを t 検定で検討・考察した。

1 点目の因子分析の結果では、「子どもの貧困状況の捉え方 (Table 1)」「貧困状況にある子どもの

の困難についての捉え方 (Table 2)」については、因子構造が見いだされるとともに、「子どもの貧困状況の捉え方」については「保育施設」「小学校」「中学校」およびそれらを合わせた「全体」とも2因子構造であった。「貧困状況にある子どもの困難についての捉え方」については、「全体」「保育施設」は同じ2因子構造であったが、「小学校」は2因子構造であったものの、1つの項目が「全体」「保育施設」と異なった。中学校においては、3因子構造が見いだされ、「保育施設」「小学校」とは異なる結果となった。なお、「子どもの貧困状況において併せて見られる現象」においては1因子構造であった。これらの結果から、「子どもの貧困状況の捉え方」「子どもの貧困状況において併せて見られる現象」においては、「保育施設」「小学校」「中学校」で違いが見られなかつたものの、「貧困状況にある子どもの困難についての捉え方」においては、「保育施設」「小学校」「中学校」において違いが見られた。

Table 1 貧困状況の捉え方

	F1	F2
因子間相関 ; $r=.49$		
F1 : 基本となる生活基盤の不安定さ ( $\alpha=.88$ )		
医療を控えている	.85	-.04
服装が適切ではない	.85	-.03
食事が十分にとれていない	.80	-.02
住環境が劣悪	.80	-.02
家事を子どもが多くする	.57	.07
教育費が十分ではない	.52	.24
F2 : 家庭の各種支援費の受給 ( $\alpha=.85$ )		
児童扶養手当受給	-.09	.93
就学援助費受給	.03	.77
生活保護受給	.09	.73

Table 2 貧困状況にある子どもの困難の捉え方

	F1	F2
因子間相関 ; $r=.54$		
F1 : 子どもの心身における健康 ( $\alpha=.90$ )		
健康面（体調不良を訴える）	.86	-.05
体力面（体力がない）	.81	-.03
こころの状態の安定性・健康	.78	-.05
園や学校での欠席が多い	.77	.02
自己表現力	.69	.08
自己肯定感・自尊心	.66	.14
F2 : 子どもの学力 ( $\alpha=.97$ )		
読み書き・計算などの基礎的学力	.01	.98
基礎的な学力以外の学力全般	.01	.95

上記については、公益財団法人子どもの貧困対策センターあすのば（2016）が、貧困問題を「貧」（低所得などの経済的問題）と「困」（一人ひとりの困りごと）に分け、家庭の「貧」を改善するだけではなく、子どもたちの「困」も支援していくことの必要性を述べていることと合致するであろう。調査対象者はどの機関に所属しているかにかかわらず、子どもが暮らす家庭の「貧」の部分と、子どもを取り巻く生活状況の不安定さによって生じる、個々の子どもたちの「困」の部分を貧困状況と捉えていることがうかがわれた。

本調査結果全体でみると、貧困状況にある子どもの困難についての捉え方において、主に子どもの生活面から生じる心身の健康的側面と、子どもの学力面におけるものに大別された。大綱でも、

「指導の改善に向けた当面の重大施策」として、「生活の支援」と「教育の支援」を謳っているが、保育現場や教育現場に所属する調査協力者は、子どもの貧困状況から付随する困難として、「子どもの心身の健康」と「学力」に特に注視していることがうかがえた。

2点目のt検定の結果では、貧困家庭への支援における「必要群」と「不要群」の2群において、「全体」では22項目(table 3)、「保育施設」では14項目、「小学校」では11項目、「中学校」では9項目において有意差が見られた。「保育施設」「小学校」「中学校」の順で2群間の有意差の見られる項目が減少した。保育施設では「貧困状況にある子どもの困難についての捉え方」の項目が多く、「小学校」は「子どもの貧困状況の捉え方」の項目が多いことが特徴だった。

Table 3 貧困家庭における自身の業務の必要性の有無別の平均値、SDおよびt検定結果(全体)

	必要		不要		差の検定	
	平均値	SD	平均値	SD	t 値	
1-1 生活保護受給	3.71	0.89	3.43	0.86	2.78	**
1-2 児童扶養手当受給	3.51	0.90	3.24	0.78	2.67	**
1-3 就学援助費受給	3.54	0.86	3.12	0.82	4.38	***
1-5 教育費が十分ではない	3.95	0.72	3.61	0.80	3.83	***
1-6 服装が成長に応じていない	4.37	0.72	4.15	0.79	2.59	*
1-7 医療を控えている	4.53	0.72	4.27	0.78	3.16	**
1-8 住環境が劣悪	4.58	0.68	4.34	0.74	2.92	**
1-9 家事を子どもが多くする	4.06	0.89	3.81	0.83	2.56	*
2-1 両親不仲	3.49	0.73	3.23	0.75	3.12	**
2-3 家庭が地域から孤立	3.65	0.81	3.34	0.79	3.30	**
2-6 友人がいない	3.18	0.83	2.93	0.64	3.16	**
2-7 登園渋りや長期欠席の経験	3.45	0.82	3.19	0.78	2.95	**
2-8 卑屈、自分に自信がもてない	3.54	0.78	3.26	0.74	3.16	**
3-3 健全な生活習慣・食習慣	4.00	0.85	3.72	1.06	2.43	*
3-4 体力面(体力がない)	3.31	0.89	2.98	0.98	3.14	**
3-5 園や学校での欠席が多い	3.40	0.89	3.08	0.98	3.03	**
3-6 健康面(体調不良を訴えることが多い)	3.41	0.88	3.10	1.01	2.91	**
3-8 生活自立能力	3.26	0.99	3.01	0.92	2.28	*
3-9 意欲・チャレンジ精神	3.21	0.87	2.92	0.91	2.94	**
3-11 こころの状態の安定性・こころの健康	3.77	0.81	3.41	1.00	3.34	**
3-12 自己表現力	3.38	0.89	3.16	0.97	2.12	*

3-13 自己肯定感・自尊心	3. 62	0. 91	3. 28	1. 09	3. 10	**
* $p < .05$ , ** $p < .01$ , *** $p < .001$						

問1の子どもの貧困状況の捉え方からは9項目中の8項目が、問2の子どもの貧困状況においてみられる現象からは9項目中の5項目が、問3の貧困状況にある子どもの困難についての捉え方からは13項目中の9項目の合計22項目において、貧困家庭への支援についての必要群と不要群の2群で有意な差が見られた。

調査対象者にとって、自分の業務として貧困家庭への支援を必要だと感じている群のほうが、必要だと感じていない群よりも貧困の捉え方、貧困において見られる現象、貧困状況にある子どもの困難についての捉え方の中の多くの項目に違いが生じた。項目の多くが、相対的貧困につながっているものであるが、貧困家庭への支援を自らの業務において必要だと感じているからこそ、経済的困窮に留まらない、子どもたちの生活の困難さなどにより気づきがあるものと考えた。



### 3. 視察による知見

#### 3-1 子どもの貧困対策センター公益財団法人あすのば

平成31年3月10日（月）に、子どもの貧困対策センター公益財団法人あすのばの小河光治理事長、村尾政樹事務局長からお話を聴くことができた。

特に子どもの貧困対策ハンドブック作成の経緯をお伝えするとともに、小河理事長に「子どもの貧困の連鎖を断ち切るために求められること（仮）」、村尾事務局長に「子どもの貧困における解決への取り組みとは（仮）」のテーマで、執筆を依頼し、承諾いただけた。

話題としては、制定から5年を経た子どもの貧困対策法の見直しにおけるあすのばの提言について、「貧困の連鎖の断ち切りとともに、現在の貧困の支援についての取り組みの強化」「子どもの貧困は自己責任ではなく社会の課題であるということの明記」「家庭や学校に加えて『第3の居場所』の運営支援について」についてお話ししていただいた。



あすのばが常々言っている、貧困については「貧」の問題と個々人の「困」の問題の両方にアプローチすることの重要性を最確認することができたとともに、ハンドブックでは、できる限り、「困」に部分に焦点を当てた構成にしたいと考えた。

#### 3-2 中部大学主催学習教室「きみいろ」

平成31年3月11日（火）に、中部大学吉住隆弘准教授が中部大学の学生たちと主催している学習教室「きみいろ」を視察した。

吉住准教授からは、現代の子どもの貧困の特徴や、地域支援の一環として、生活保護受給世帯をはじめとする生活困窮世帯の子どもたちへの無料学習教室「きみいろ」を主催することになった経緯、現状などについてお話を伺うことができた。特に、相対的貧困家庭は、塾などに通うというような余力に乏しい場合が少なくなく、学びの格差を解消するために、「きみいろ」を主催されたと教えていただいた。

夕方18時から20時まで中学生を対象とした学習教室がスタートし、20時から1時間を学生によ

る検討会の時間となっていた。学習支援ということに力点が置かれながらも、子どもの状態によっては学習だけではなく、子どもの悩みなどを聞くということも柔軟に行われていたことが特徴的だった。

この「きみいろ」の活動は、地域社会（サードプレイス）が子どもたちを支援している良い例だと考えた。

#### 4. 江別市版子どもの貧困対策ハンドブック作成の経緯

本事業では、あすのばの表現を借りるならば、「貧」よりは「困」に焦点を当てたアプローチができるないかを考えた。

保育施設、小学校、中学校の先生、職員の皆様を対象としたハンドブックという形式で、一人ひとりの子どもたちや、子どもたちのご家族への、相対的貧困の背景にある「困り感」とそれらへの対応について、道内道外からの実践家や研究者、若者などの皆様に執筆いただいた。

○ このハンドブックというのは、この通りやればこうなるという、ハウツウ本、マニュアルではない。主にさまざまな地域で、真摯な実践や研究をされている、第一人者の方々に「子どもの貧困対策」において考えていること、特に子どもや若者の困り感を踏まえた現状や対策を執筆していただき、江別市内の保育現場、教育現場で真摯な実践をされている皆様に、子どもの貧困について知つていただき、理解していただき、ご自身が子どもたちの困り感を踏まえたアプローチをされる際の参考になるような、もしくはご自身を後押しするようなものになればと考えている。

#### 5. 江別市版子どもの貧困対策ハンドブックの概要

次ページのTable 3が、江別市版「子どもの貧困対策ハンドブック」構成及び執筆者一覧である。

Table 3 江別市版「子どもの貧困対策ハンドブック」構成及び執筆者一覧（微修正の可能性あり）

## 江別市版「子どもの貧困対策」ハンドブック執筆者（案）

卷頭言	子どもの貧困における解決への取り組みとは	執筆者（敬称略）
はじめに	江別市版『子どもの貧困対策ハンドブック』作成を考えた経緯	村尾 政樹 飯田 昭人
序章	平成29年度版江別市保育者・教職員対象子どもの貧困に関する意識調査の結果からみえること	飯田 昭人
第1章	保育および教育現場から子どもの貧困を考える	
1-1	保育現場からうかがえる子どもの貧困	井内 聖
1-2	学校現場からうかがえる子どもの貧困	本間 康子
1-3	学校現場からうかがえる子どもの貧困	鈴木 恵一
第2章	地域の実践から子どもの貧困を考える	
2-1	ひとり親家庭の現状と貧困を生む社会的背景	平井 照枝
2-2	不登校の子どもの関わりからみえる子どもの貧困について	山田 大樹
2-3	多世代交流広場の実践から子どもの貧困について考える	小林 真弓
2-4	学習の機会格差解消の実践から子どもの貧困について考える	高橋 勇造
2-5	子ども・若者支援の実践から子どもの貧困について考える	松田 考
2-6	地域支援の実践から子どもの貧困について考える	橋本 正彦
第3章	若者が考える子どもの貧困	
3-1	私が子どもの貧困対策に携わる理由	深堀 麻菜香
3-2	私が子どもの貧困対策に携わる理由	二本松 一将
第4章	専門職・研究者の立場から子どもの貧困を考える	
4-1	子どもの貧困に対して教育学者として考えていること	西村 貴之
4-2	地域の食生活支援の現場から子どもの貧困について考える	隈元 晴子
4-3	小児科医療の現場から子どもの貧困について考える	藤根 美穂
4-4	生活困窮者支援の現場から子どもの貧困について考える	櫻井 耕平
4-5	独立型社会福祉士の立場から子どもの貧困について考える	高橋 岳志
4-6	社会的養護児童支援の実践から子どもの貧困について考える	片山 寛信
4-7	家庭裁判所調査官の経験から子どもの貧困について考える	品田 一郎
終章	子どもの貧困の連鎖を断ち切るために求められること	小河 光治
おわりに	子どもの生きづらさに焦点を当てることの大切さ	飯田 昭人

## 6. おわりに

終わりになるが、江別市大学連携調査研究事業補助金採択事業に、平成29年度、30年度と2年連続採択していただいたことに深く感謝申し上げます。

ハンドブックは、令和元年5月初旬に完成予定であるが、このハンドブックが江別市内の保育関係者、教育関係者に周知され、全ての子どもたちやそのご家族が、少なくとも経済的困窮における困り感に対して、一人で抱え込まなくともよい状態になればと願う。

末筆になりますが、江別市役所企画課の大槻宏明様には、私に対し、このような機会を与えていただいたばかりか、率先して江別市を活性化させたいという大槻さんの熱意に心打たれました。また、北翔大学総務課の鈴木美智子主査には、報告書の作成や予算の支出に当たり、大変なご苦労をおかけしてしまいました。報告書および、間もなく完成するハンドブックを形にできたのは、本事業の裏方をご担当くださった、北翔大学の事務職員の皆様のおかげであることを付言します。